



現代の青年の特質を 高校生に授業する

金沢大学人文学類 教授

岡田 努 (おかだ つとむ)

高校などに出前授業に行く機会が多くなってきました。とくに心理学分野は高校からのリクエストが多く、常に第一希望として挙げられています。ではこうした授業ではどのような位置づけで、何を語ればよいのか、思い悩むことも少なくありません。2013年8月3日に「高校生のための心理学講座シリーズ（中部地区Ⅱ）」として「人格・発達心理学―若者の心と対人関係友だち、恋愛」と題した一コマを担当させていただきましたので、それを一例として「私の出前授業」をご紹介しますと思います。

出前授業がもつ本来の意義として、大学の授業とはどのようなものなのかを垣間見る機会を与えるものととらえています。そのため実際の授業からかけ離れ、あまりにかみ砕きすぎた話では方向が違ってしまいます。しかしながら、基礎知識のない高校生に専門課程の実際の授業をそのまま持ち込んでも、全く理解できないものになってしまうでしょう。そうしたことから出前授業の場面では、初年次や専門外の学生が聴講する教養教育（金沢大学では共通教育と呼ばれています）の授業内容をベースに、トピックを選んで話をすることを基本にしています。

この中でも青年期の大きな特徴といわれる友人関係の深化についての授業を挙げさせていただきます。

今回の講義ではまず、青年期までの発達の中での自己把握と他者把握の発達について紹介しました。これは柏木（1988）で述べられた論を軸に、自己の内面、他者から見られる自己への意識と他者の見えている姿と他者の内面の推測

の関係について図解したものです。こうした明快な論は、青年期のただ中にいる高校生たちにとっては、ある種、新しい知的発見につながるものと思います。次に松井（1990）の青年の友人関係の三つの機能の紹介をいたしました。すなわち、緊張や不安、孤独などの否定的感情を和らげ解消する「安定化機能」、身内でない相手に自分の気持ちを伝えたり、信頼し、暖かい関係をもつための知識や振る舞い方の技術を学習する「社会的スキルの学習機能」、友人が自己の行動や自己認知のモデルになるという「モデル機能」についてです。自己の問題と対人関係の問題がつながっているということは、専門家にとっては当然と思われるのですが、高校生にとってはこれも新たな発見であるようです。

こうした青年期についての基本的な理解を土台に、より現実の若者に近づいたトピックとして、私の研究テーマである「現代の青年の特質」についての話を行いました。現代の青年は、対人関係が希薄で、傷つきやすく、自分自身に閉じこもりがちである、あるいは自分自身について関心が薄く内省力が乏しいため未熟であるなどといった言説が数多くみられます。しかしこれは本当のことなのか、データとしてはどのように示されるのか、パーソナリティ研究に掲載された自身の研究（岡田、2011）を一例として提示いたしました。

すなわち、現代青年は友人関係において相手から傷つけられることを強く恐れており、こうした事態を避けるために、相手を傷つけないよう気を使った関わり方を心掛けているのではないか。そのようにすることで、相手から拒絶されず受容され、それによって自尊感情が維持されるのではないかという仮説モデルについて、



Profile — 岡田 努

1991年、東京都立大学博士課程人文科学研究科単位取得満期退学。博士（心理学）。新潟大学教育学部助手、講師、助教授、立教大学教職課程助教授、金沢大学文学部助教授を経て、2008年4月より現職。専門は人格心理学、青年心理学。著書は『現代青年の心理学：若者の心の虚像と実像』、『青年期の友人関係と自己：現代青年の友人認知と自己の発達』（いずれも世界思想社）、『健康心理学・臨床心理学へのアプローチ』（共編、金子書房）など。

先行研究などをふまえて呈示しました。結果は次のようなものでした。傷つけられる関係を回避することで葛藤を回避しても、相手から傷つけられる恐れそのものは低減せず、ゆえに、被拒絶感も低下しない傷つけることを回避し相手を気遣えば、その結果として相手から拒絶されずに済むだろうと予期され、自尊感情が保たれる。また、高校生から大学生にかけてこのようなメカニズムはより明確なものになるらしいことも見出され、それについても紹介しました（図1）。

パス図を用いた研究モデルは、予備知識がない人にも少しの説明を加えるだけで理解しやすいため、こうした授業での例示には扱いやすいものの一つです。

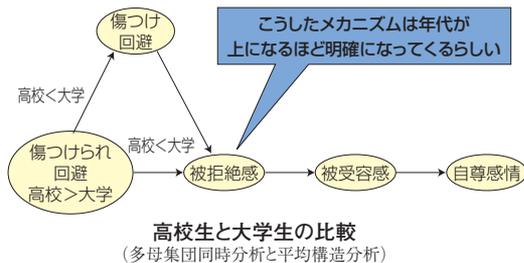


図1 授業内で用いたパス図の一例

また今回は行いませんでしたが、対人認知などの簡単な授業内実験を行うことも、興味を高めるうえで有効なようです。自分たちの「心」のありさまがリアルタイムでみえる体験は、高校までの授業とは違った新しい知的刺激になるようです。さらにクリッカーや集計機能をもった電子回答システムを用いれば瞬時に平均値などその教室での全体的傾向を算出できるため、既存データとの比較などもできるでしょう。これからはスマートフォンのアプリなど、さまざまな電子機器を活用してこうした授業内実験が可能になるかもしれません。ただし結果がはっきりと出やすい実験を選んでおかないと、デモンストレーションと

しての効果が薄まってしまうかもしれません。

以上のように高校生自身の現実生活と関連するようなトピックを選び、関連した実証的研究を紹介することで、関心を持たれるのではないかと期待しております。青年期という研究分野に限定される話ではありますが、単に心理学の授業体験、学問紹介という面だけでなく、青年期ただ中に居る高校生が、自分自身への気づきにつながればよいと思っています。しかし、いくら前提となる研究知識が不要といっても、実証的な研究としての内容は維持し俗説心理学にならないようにという注意は必要です。なるべく実際の研究データを示すことで、それによって心理的事象を見るという心理学の基本的なあり方が、理解されることを狙っております。

実際の講義では、このほか、青年期の恋愛に関する研究の紹介など、より身近なテーマについても述べましたが、紙幅の関係で省略いたします。また、高校などに派遣された出前授業の場合、通常は、「心理学とはどういった学問なのか、どのような研究領域があるのか」という話からスタートしています。高校生は「心理学」という分野にはなじみがありませんし、多くは誤ったイメージでとらえていると思われるからです。しかし今回の講座では、複数の講師による連続講義であり、すでに先行する講師から丁寧な説明がなされていたため、こうした話は割愛しました。

文献

- 柏木恵子（1983）『子どもの「自己」の発達』東京大学出版会
 松井豊（1990）「友人関係の機能」斎藤耕二・菊池章夫（編著）『社会化の心理学ハンドブック：人間形成と社会と文化』川島書店 pp.283-296。
 岡田努（2011）現代青年の友人関係と自尊感情の関連について。パーソナリティ研究, 20, 11-20.